

「私は…ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」
(ヨハネの福音書9章25節)

わが目は今開く

1976年4月号の英語版リーダーズダイジェストに忘れがたい実話が載ったが、引っ越しの際、行方が分からなくなったまま長い年月が流れた。ところがつい先日、インターネットでその話を再発見することができた。以下はその要約である。



双方の父親同士が親友であったため、私と妻は結婚が早くから決まっていた。やがてお互いが適齢期となり、それまで一度も彼女の顔を見たことがないまま結婚の儀が執り行われた。式が終わって二人きりになったとき、やっと真紅の布を持ち上げて、妻の顔を見ることができるのだ。しかし待ちに待ったその瞬間、妻の顔を見た私は自分の目を疑った。顔中にできたあばた、歪んだ鼻、そして薄い眉毛の下の腫れぼったい目…。私は嫌悪感で満たされた。

何ということをしてくれたのか、と怒りに震えて母に文句を言うと、「運命として受け入れなさい。不細工な女は幸運をもたらす、美人は悲運を呼ぶと言うでしょ」と言う。しかし、私の苦悩は和らぐことなく、妻と別居することにしたのである。

その後一緒に暮らさざるを得なくなっても、私の気持ちは一向に変わらなかった。妻はいつもうつむいている。私が議論をふっかけても従順な微笑みを浮かべるだけ。これでは感情も意志もない綿の塊と変わりはない、と思うばかりであった。

生活は苦しかった。下級軍人である私の給料は少なく、家賃と食料で収入のあらかたは消えてしまった。子どもはしょっちゅう病気にかかるので、その医療費もかさむばかりだった。しかし、妻は妻わらで帽子やゴザを作ったり、漁村に住めば漁網の破れを繕う仕事をしたりして小銭を稼いだ。ただ、家計が助かるとわかりながらも駐屯地には住まないようにした。妻の姿を私の同僚に見られてしまっただけでは困るからである。

私が士官学校で水泳の教官をしていた頃のことである。右目が炎症を起こし、ほとんど何も見えないまでに悪化した。病院で診てもらったところ、角膜炎、という診断がくだされた。「おそらくタオルかプールの水から感染したのでしょう」とのことであった。それから約1年後、角膜移植をすれば、全く見えなくなった右目も視力が取り戻せる、という朗報を耳にした。それを伝えると、妻はおもむろに預金通帳を取り出し「一生懸命働いて貯めたお金が500ドルあります」と言うのである。「それでも足りなければ、何とかします。あなたは私とは違います。字が読めない私は目が見えても盲目です。でも字が読めるあなたには両目が必要です」と言うのであった。

私は手術の順番待ちのリストに名前を載せてもらった。それから一ヶ月後、病院から電話があった。「ひどい交通事故に遭った人が、奥さんにこう言い残して亡くなったそうです。自分の臓器を売って、子どもの養育費の足しにしてほしいと。その角膜は250ドルしますが、どうしますか」

手術と病院での出費はさらに200ドル上乗せになるが、私は同意し、翌日入院することに決まった。私はまれに見る幸運をつかんだのだ。角膜が手に入るまでに何年も待つ人はざらである。

角膜移植の手術が始まった。目の周辺の神経はすでに麻酔がかけられている。しかし、器具の金属音や医師の話し声は聞こえていた。

手術室から運び出される時、娘のユンが唇を耳元に寄せてこう言った。

「よかったわね。無事終了よ。お母さんも来たかったけれど、怖かったみたいで」

「来なくていい、と言いなさい。俺は大丈夫だから、心配するんじゃないと」

結婚して30年ほどになるが、妻と一緒に外出したことは一回もなかった。それどころか、早く死んでくれないかな、と何度願ったことか…。

二週間が経ち、縫合した傷が癒えてきた。退院も間近である。私は「角膜を提供してくれた人のお墓にぜひお参りをしたい」と娘に告げた。やがて身の回りのものがはっきり見えるようになり、退院許可が出た。私は天にも昇る心地であった。

家の中に入っていくと、妻がちょうど料理をもって台所から出て来るところだった。私の姿を見ると、妻はすぐに顔を下に向け、「お戻りになったのですね」と小声で言った。

「こうして目が見えるようになったのはおまえのおかげだ。ありがとう」。これは思い出す限り、私が初めて妻に言った感謝のことばだった。

妻は私のわきを急いで通ると、料理を食卓に置き、背を向けたまま、壁にもたれてしくしくと泣き始めた。

「あなたがそう言ってくださっただけで十分です。私が生きてきたことは無駄ではありませんでした」。

それを聞いていた娘は泣きながら「お父さんに言うべきよ。お父さんに角膜を提供したのはお母さんだって！」と叫びながら妻のからだを揺さぶった。

「私は当たり前のことをしてただけだからいいの」と妻は言った。

私は妻の両肩をつかみ、妻の顔をのぞきこんだ。何と左目の虹彩が、手術前の私の右目のようにどんより曇っているではないか！

「ああ、金花よ」。私が妻の名前を口にしたのはこれが初めてであった。

「なぜ、…なぜおまえはこんなことをしたんだ」と私は妻を激しく揺さぶりながら強い調子で訊ねた。

「それは…あなたが私の夫だからです」。そう言って妻は私の肩に顔をうずめた。

私は妻を固く抱きしめた。

そして、私は彼女の足元にくずおれたのだった。

以上がこの実話の概略である。妻の愛に気づけなかった筆者は盲目であった。しかし、妻の真の犠牲を知ったときに、心の目が開かれた。私たちも、キリストの愛にかつては盲目であった。しかし、私たちの罪のために罪なきご自身を十字架につけて、私たちを永遠のさばきから救ってくださったという事実を知り、受け入れたとき、私たちの目も真の意味で開かれたのである。